

取材に入ったとき、その湖畔に第二次世界大戦後しばらくケストナーが、生涯のパートナーだったルーゼロッテ・エンダーレとともに暮らしていたことを知ったのである。どういう経緯でケストナーがここに？と興味を覚え、著作を読み直し、彼の人生にあらためて感銘を受けた。そこで、ミュンヘンにいくなら良い機会なのでもっと研究してみようと思ったのだ。当時は、まだエンダーレさんがご存命で、図書館から連絡してもらったところ、日本の子どもの本の作家なら会っていただけとのこと。お会いできるのを楽しみにしていたのだが、渡航の前年の冬に急逝されてしまい、その望みはかなわなかった。ケストナーの生き方や、エンダーレさんの名前をつかった『ふたりのロッテ』のことなどあれこれ聞いてみたかったのだが……。

でも、図書館滞在中は市内に出かけてケストナーのことを調べたり、図書館に設けられていたケストナーの塔（ケストナーの遺品などが置いてあった）で、ミヒャエル・エムデさんといういろいろとお話しができたりした。そしてケストナーが『飛ぶ教室』のあとがきに書いていたように、「自分が飛ばされてしまった」みたいに三か月の時間がたちまちすぎさったのである。そのとき、ふいにこのまま海外に暮らすのも悪くないかと思いついたのだ。ドイツの風土や暮らしが、当時三十二歳のぼくには、新鮮で魅力的だったせいだ。

幸いというか、不幸というか、ドイツに渡る直前に、購入したばかりの新車が鉄砲水で水没し、おしゃかになっちゃったところだった。まさに渡りに船。帰路の途中、空港のカフェで、コースターの裏側をつかって、あれこれ計算してみたところ、印税の預金があったし、保険金でつましく暮らせば二年ぐらいいは、「む、だいじょうぶ」と思えたのである。原稿はどこでも書けるわけだし、まあ、食えなくなったら日本に帰ればいいや……と。

でも、海外に暮らすというのは、思っていたよりもずつとたいへんだった。まずビザの問題がある。ふつうの海外旅行などは三か月しかいられない。それでは家を借りたりできないし、銀行口座も作れない。

それになにより、ぼくはそのころドイツ語がまったくできなかった。ミュンヘン国際児童図書館では英語が片言でもできればなんとかなったのだが、暮らすとなるとやはりそれでは困る。それでとりあえず友人のいたボンに住むことにし、語学学校に籍を置いて学生ビザを入手したのである。

で、はじめはドイツ語の初歩の初歩「どこからきたの？」から習い始めたのだが……。一年近くたって、ともかくもドイツ語の中級を終えるころ、こんなに毎日、勉強ばかりしていいのだろうかと思いだしたのだ。日々、ドイツ